
女子高DAYS

まがりまめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女子高DAYS

【Nコード】

N9154P

【作者名】

まがりまめ

【あらすじ】

女子高の日常風景

主人公・津島をとりまく人間模様

1月9日 昼休み 津島・高野・水屋・谷

「お菓子いる人ー」

テスト前の昼休み。私が自分の席で生物と格闘していると、どこからともなく水屋と高野、そして谷がやってきて、迷惑なことにも私をとりかこみ、奴らも生物と戦い始めた。

しかし、このメンバーでまじめにやれるわけがない。

谷がカバンからとりだしたお菓子により、大混乱となった。

「あつ！イチゴ味初めて見た！」

「いるいる！あー」

ちらりと見ると、イチゴ味のグミだった。グミもイチゴ味も、あんまり好きじゃない。

「高野ー、水屋ー、はい、津島ー？」

はい、と口の前に差し出されたグミを、私は見、首を振って一言、

「いない」

と告げた。ふわりとイチゴの匂いが鼻腔をくすぐる。

この人工的なおいが、だめなのだ。本物のイチゴなら、好きなんだけれど。

「え、何で？」

いつもなら食うやろ？と谷が驚く。

「うん、イチゴ味、あんま好かん」
「うええー!!」

とたん降ってくる三人の声。ああもう本当、いちご談義してる場合じゃないのに！

「ちゅーかその匂いがだめ」

すると。

目の前に二つ、人の悪いにやりとした笑みが見え、その瞬間さつきよりもきついイチゴの香りが鼻のあたりに充満してきた。

「わっ、おまえらやめろっ！」

「いやん、イチゴの香り」

高野と水屋が、わざと息を吹きかけてくる。しかも、結構な至近距離で。

「くさっ！イチゴくさっ！」

「あっ！人の息くさいとか言うなし！」

「だってくさいんやもん、いちごっ！」

ばさばさと手に持っていたプリントで、顔の前をあおいでも、さして効果はなく。

いつの間にか笑っていた私は腹をまげて爆笑した。

「津島っ、ほら」

少し笑いがひいて起き上がったも、また水屋がイチゴの香りをまき

ちらし。

「わっ、おまえ握りっぺの原理使っなよ！」

息を吐いた口の前でこぶしを握り、私の前にそれを広げてみせた水屋に向かって、つつこむと、

「握りっぺの原理っ」

と高野が噴出した。

ああもう本当、こんなことやってる場合じゃないのに。
テスト開始まであと10分！

だけどどうしても、笑いは引いてはくれなかった。

1月9日（放課後） 河早・津島

「あの留学のやつ、いいなっち思った」

学級委員のオリエンテーションのため、河早と二人で物理室へとむかっていた。

終礼で春休み用のホームステイ語学研修のプリントが配られ、それを見て私が一言「イギリス行きたい」と言ったのだ。

河早とは高一の夏、一緒にイギリスへ海外研修に行った仲だった。

「河早はどこ行きたい？」

「アメリカかカナダ！」

「アメリカあ？何で？」

「だってアメリカやったら国連の本部見学できるんよ！いいと思わん？」

「あー」

普段あまり興奮に輝いた河早の顔なんて見ないから、この時の彼の顔を見て少しびっくりした。

びっくりしたとともに、良いな、と思った。

「あんなところ滅多に入れんし！」

そういえば河早って、英語の方に進むんだっけ。

「昔本で読んだけど」

ふと思い出して語りかける。

「国連の子供版みたいなものがあるって」

「あつ！しつとる！」

「なんかすごいらしい。なんの本に書いてあつたのかなー・・・」

どこで読んだっけ。たしか著者がそこで圧倒されたって書いてあつたな。

あれは確かー・・・

「思い出した！若い政治家のインタビュー集みたいなやつだ」

一年か二年前、政治家を目指した時期に買ったもの。
表紙も内容も、すべてよみがえってくる。

「読む？」

首を傾け、河早を見ると。

「読む」

さきほどと、寸分も変わらぬ輝いた瞳が、こちらを見返してきた。

冷戦 津島・河早・白友・水屋

「また喧嘩したの」

あきれた様子で、私は白友を見た。

「うん、今度は結構もったと思ったんだけど」

話の内容とは裏腹に、白友の顔は笑っている。そういう私の顔もけして深刻ではなく、つまり、日常茶飯事の光景なのだ。

白友と水屋。

三年間同じクラスにいて、彼女達がよく喧嘩をするということを今年初めて知った。聞けば、一週間に一度は喧嘩をする。普段はかなり仲が良くせに（毎休み時間ごとに、水屋が白友の席にいくほどだ）、ひとたび戦闘状態にはいれば、一言も言葉を交わさない。目も合わさない。激しく言い合うのではなく、冷戦のような状態なのだ。だから、二人とあまり仲がよくなければ、気づかない。そしていつの間にか、またもとの状態に戻っているのだ。これが、毎週繰り返される。私が二人の冷戦に気づいたのは、今年の一学期のことだ。珍しく、水屋が白友の席ではなく、私の席にやってきた。そして、何も言わずに椅子をのっとり、何か用事があるのかと思いきや、そこでぼうつとしているだけなのだ。授業をはさんで、その次の休み時間も同じ。その次、その次もといった様子で、さすがに不審に思い白友にワケを聞いてみた。

「ああ、今喧嘩しとるけ」

さも、当然、といった感じの白友の横から、河早の「またかよ」という声が飛ぶ。そしてそこで冷戦の存在を知ったというわけだ。

そこから、何回か（といっても結構頻繁に）水屋は私のところに来てくるようになった。どうやら、白友と喧嘩した時の避難場所はこのこと、勝手に決め付けられたらしい。

迷惑もはなはだしい。

そして今日も、二時間目が終了したと同時に、彼女がやってきたの

だ。

「津島、椅子」

と、打ち捨てられた子犬のような顔をして。

「なんであんなに喧嘩するんかね」

はあ、とため息をつかんばかりにぼやく。

「さあ、でもよくできるよね」

横を歩いている河早が、にやつと笑った。掃除時間、箒を持った生徒でごった返す廊下を美術室に向かっていた。いつも木屑や紙の破片がちらばっているそこは、掃除をしてもしなくても分からない。監督の先生もこないの、体よくさぼれる穴場だった。

「思う！不満そんなにあるんかね」

一週間に一度、相手に不満をぶちまける。つまり、一週間で相手に対しての不満がたまるのだ。

「いやあ、あの二人の場合は不満って言うか、なんか別物かも」

「別物？」

そつえば。河早と白友は仲が良い。私が白友と仲良くなるずっと前から。

「河早、なんかしつとるん？」

私知らない、二人の間柄について。河早はうーんと微妙な笑みをもらし、しばらく考えると、

「あの二人は、変なんよ」

と、言った。つまりは、河早にもよくわかってない、といった所か。

「喧嘩するほど仲が良い、かなあ」

収集のつかなくなった話は、結局一般論にもっていかれ。

「うん、そうやね」

河早の一言によって終止符が打たれた。

次の日。

「あさみー、椅子」

当然のように水屋は白友の席に向かつていった。冷戦終結、マルタ会議はいつ何処で行われたのだろう、一つの椅子を半分に、二人で座って仲良くこれまたひとつのアイポッドで音楽を聞いている。

喧嘩をする。嫌な所を相手に伝える。仲直りする。喧嘩するほど仲が良い、一見パラドックスなこの言葉も、紐解いてみれば十分に理論的なものである。きっと、喧嘩が、白友と水屋の友情なんだろう。本気で渡り合うからこそ、自分の本当の部分を相手に見せることになる。取り繕った関係とは違う、生の間柄。他の人とは違う、一見不思議に見えるつながり。気の置けない仲だからこそ、こんなに喧嘩をするのだ。

「痴話げんかみたいなもんか」

二人を見て、ふうとため息をつくとき、
「なるほど」

二人の向こう側から、河早が笑みをこぼした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9154p/>

女子高DAYS

2011年1月8日20時06分発行